

日本文學
鑑賞辭典
古典編

吉田精一編

埼玉大学教授・文学博士

吉田精一 編

日本文学鑑賞辞典

古 典 編



東京堂出版

複不
製許

日本文学鑑賞辞典
(古典編)

定価は箱またはカバ
に表示しております。

昭和三五年二月一五日 初版發行
昭和五二年五月二〇日 一九版發行

編者 吉田精一
発行者 岩出貞夫
印刷所 文殊印刷有限公司
製本所 渡辺製本株式会社

發行所 株式会社 東京堂出版
東京都千代田区神田錦町二ノ五(〒二〇三)
電話 東京 二八三六 振替 東京 三三七〇

序 文

文艺作品は、社会的、歴史的産物として、その作られた社会や、歴史的状況を反映していることはもちろんである。われわれはそれを通じて特定の時代の、特殊な環境にあった人間の、思想や感情や、また彼らが追求していた問題を、ききとることができる。一つの作品を理解するにあたり、われわれはことに社会環境と周囲の条件とをこまかく調査することによって、その意義を正しく読みとる努力をわれわれ自身に課さねばならない。

しかしながら、文艺作品はたんなる記録や報告ではない。それが長い年月の風雪にたえて、今日の読者にもうつたえる力をもっているのは、そこに時間と歴史とをこえる不滅の生命力と、不变の美しさとを内在しているからにほかならない。

一見すれば前者は、「知る」ことを中心命題とし、後者は、「味う」ことを目的とし、ともに別のみちを歩むように見える。前者が「真」をめざすならば、後者は「美」を志しているかのようである。しかしわれわれの考えるところによれば、両者は決して別のものではない。正確に「知る」ことによつて、ふかい「味い方」がうまれ、深い「味い方」を待つて、正しく「知る」ことができる。われわれの仕事の理想は、それが容易には達せられないことを承知の上で、パスカルのいわゆる「幾何学的精神」と「織細な精神」との合致の上に置かれねばならない。

従来の文学辞典は、辞典としての客觀性を尊重するという意味もあって、重点を主として文献学的な方面に置き、深く味うという鑑賞面には粗漏であった。当然、「辞書的な」という形容詞が表現する、

平板で砂を噛むような叙述でみたされる場合が多かった。ことに国文学方面のものには、その種の傾向が強く、辞典ほど面白い読み物から遠い性格のものはなかつたのである。

本書は、この点にかんがみ、正しい文献学的な調査研究は踏まえつつも、それを幾分裏にまわし、意義内容をいかに読み味うべきかにいう、鑑賞面を主眼として、新しい編纂をこころみた。「文学鑑賞辞典」と銘うつたのは、その理由からである。

このために、古典・近代の二編を通じて、日本文学史上の名作佳編ができる限り網羅し、忠実な解説に加えて、正しく深い鑑賞による価値判断と、史的意義の設定をこころみた。出来栄えについては、大方の批評を待つべきだが、作品の本質的な解明と味解という点では、在來の辞書類から數歩前進することを期したのである。

初学の人たちにとっては、日本文学鑑賞の手引き書となり、研究者や教授者にとっては参考して役立つものとなり、一般の人々にとっては、独立した興味ある読み物となるというのに、この書編集のねらいの一つでもあつたが、多少ともその目的が達せられているとすれば、編者としてよろこびに耐えないのである。

なお、このしごとのために、中堅、新進の専門家数十名の参加をねがつたが、ことに編纂者としては、長野晉一、竹下数馬、鈴木重三、古川清彦、野村貴次の諸氏に担当していただいた。ここに記して深い感謝の意を表する。

昭和三十五年初冬

吉田精一

凡例

△本書は、上代から近世末にいたる日本文学全般から約三〇〇の作品を選び、各作品に鑑賞を施すことを主眼とした。

△項目は、各作品を五十音順に配列して構成した。し

たがって、時代・形態の方から作品を検出するときは卷頭の時代・形態別項目表または卷末の作品・事項索引により、また、作家名の方からの検出には卷末の人名索引によると便利である。

△各作家の略歴は、「作者」として項目の末尾に付し、おもな経歴および主要作品などをあげるに止めた。一作家で二作品以上収載した場合、その作家の略歴は、五十音順による最初の項目の末尾に付した。たとえば、井原西鶴の場合、「好色一代男」「好色五人女」「世間胸算用」「日本永代藏」「武道伝来記」など十五作品を収めたが、その略歴は「好色一代男」の項の末尾に示してある。

△物語・戯曲などの場合は、【梗概】を設け【鑑賞】の一助とした。作品集(隨筆集・説話集・詩集・歌集・句集その他)を項目とした場合は、その中の代表的な作品をとくに取りあげて【解説】【鑑賞】を施した。集合的な戯曲作品(謡曲・狂言・歌舞伎十

八番)および歌集(万葉集など)句集(芭蕉七部集)その他(風土記など)の大項目には作品または作家の小項目を設けた。

△【解説】中の所収文献は、便宜上、入手しやすいもののみにとどめた。

用語・符号・索引

△引用文は、原則として原文のままにした。

△難読の語には、つとめてルビを付した。ルビは原文中にあつたものも現代表記法に統一した。

△作品名・書名には、すべて『』をつけた。

△本文中に*印のある作品名は独立項目として収録されていることを示す。

△歌集・句集中の引用は、^ Vで示した。代表作品をとくに解説・鑑賞するときはこれを別行に示し、

^ Vは省いた。

△索引は、「人名索引」と「作品・事項索引」とに分けた。

執筆者・編集者

△各項目の執筆は、それぞれ専門家に委嘱し、各項目の末尾にその姓名を明記した。

△編集は、吉田精一が責任者となり、委員として鈴木重三・竹下数馬・長野嘗一・野村貴次・古川清彦の五名が参加した。

目 录

导言.....	(1)
第一章 半殖民地半封建的中国社会和资产阶级	
民主革命的兴起.....	(1)
第一节 中国半殖民地半封建社会的形成.....	(1)
一 鸦片战争前的中国和世界.....	(1)
鸦片战争前的中国.....	(1)
西方资本主义列强对亚洲国家的侵略.....	(4)
二 两次鸦片战争 中国社会半殖民地半封 建化的开始.....	(5)
鸦片战争的爆发和失败.....	(5)
《南京条约》的签订.....	(7)
第二次鸦片战争和《天津条约》、《北 京条约》的签订.....	(8)
三 中国早期资本主义的产生.....	(10)
洋务运动.....	(10)
中国民族资本主义的产生和初步发展.....	(12)
新的阶级的诞生.....	(13)
四 甲午战争和八国联军侵华战争 中国半殖 民地半封建社会的形成.....	(14)
甲午战争和《马关条约》的签订.....	(14)
帝国主义阴谋瓜分中国.....	(16)
八国联军侵华战争和《辛丑条约》的签订.....	(17)
半殖民地半封建社会的基本特点和主要	

時代・形態別項目表

藤原俊成	和泉式部集	古今著聞集	十訓抄
曾丹集	散木奇歌集	古事談	鉢かづき
西行	成尋阿闍梨母集	撰集抄	物臭太郎
山家集	新撰万葉集	發心集	一寸法師
西	歌合	沙石集	文正草子
行	和漢朗詠集	唐物語	唐糸草紙
三	神樂歌	住吉物語	福富草子
三	東遊	石清水物語	君七
三	催馬樂	苔の衣	猿源氏草子
三	梁塵秘抄	秋夜長物語	三人法師
四	○漢詩集	松浦宮物語	鉢かづき
一九	經國集	十六夜日記	物臭太郎
一九	菅家文草	建春門院中納言日記	一寸法師
一九	本朝文粹	弁内侍日記	文正草子
一九	無名草子	海道記	唐糸草紙
一九	方丈記	東閑紀行	福富草子
一九	徒然草	明月記	君七
一九	○宗教文學	神皇正統記	猿源氏草子
三	往生要集	吉野拾遺	三人法師
三	三宝絵詞	梅松論	鉢かづき
三	宇治拾遺物語	増鏡	物臭太郎
六	○說話	○歴史物語	一寸法師
一九	忍音物語	愚管抄	文正草子
一九	○お伽草子	保元物語	唐糸草紙
一九	狂言	平治物語	福富草子
一九	附子	源平盛衰記	君七
一九	末広がり	太平記	猿源氏草子
一九	狂言	義經記	三人法師
一九	附子	○戦記物語	鉢かづき
一九	花伝書	船弁慶	物臭太郎
一九	申楽談義	隅田川	一寸法師
一九	六輪一露	安宅	文正草子
一九	狂言	融	唐糸草紙
一九	狂言	井筒	福富草子
一九	狂言	忠度	君七
一九	狂言	松風	猿源氏草子
一九	狂言	自然居士	三人法師
一九	狂言	謡曲	鉢かづき
一九	狂言	狂言	物臭太郎

時代・形態別項目表

○連歌

舞の本	壹
○和歌	
新古今和歌集	三三
後鳥羽院	三三
藤原定家	三三
藤原家隆	三三
藤原良経	三三
式子内親王	三三
俊成女	三三
玉葉和歌集	三三
風雅和歌集	三三
風葉和歌集	三三
新葉和歌集	三三
秋篠月清集	三三
金槐和歌集	三三
草庵集	三三
草根集	三三
建礼門院右京大夫集	三三
小倉百人一首	九
夫木和歌抄	三三
正徳物語	三三

菟玖波集	四三
水無瀬三吟	六三
新撰菟玖波集	五六
俳諧之連歌独吟千句	五六
ささめごと	三〇
ひとりごと	七
吾妻問答	七
老のくりごと	八
竹林抄	八
老のすさみ	八
新撰犬筑波集	三八
好色一代男	三三
好色五人女	三三
西鶴諸国はなし	三三
本朝二十不孝	三三
男色大鑑	三三
武道伝来記	三三
武家義理物語	三三
懐石	三三
日本永代藏	三三
世間胸算用	三三
諸艶大鑑	三三
西鶴置土産	三三
御前義経記	三三
万の文反古	三三
浮世親仁形氣	三三
けいせい色三味線	三三
好色敗毒散	三三
恨の介	三三
薄雪物語	三三
伊曾保物語	三三
可笑記	三三

他我身の上	二二
二人比丘尼	二二
竹斎	二二
東海道名所記	二二
伽婢子	二二
○浮世草子	
竹	四四
斎	四四
哭	四四
哭坐	四四
○宗教文学	
英草紙	五五
西山物語	五五
本朝水滸伝	五五
雨月物語	五五
春雨物語	五五
昔話稻妻表紙	五五
椿説弓張月	五五
南総里見八犬伝	五五
哭坐	五五
しみのすみか物語	五五
○合卷	
英草紙	五五
西山物語	五五
本朝水滸伝	五五
雨月物語	五五
春雨物語	五五
昔話稻妻表紙	五五
椿説弓張月	五五
南総里見八犬伝	五五
哭坐	五五
しみのすみか物語	五五
○洒落本	
修紫田舎源氏	五七
遊子方言	七三
通言總籬	四九
世說新語茶	四九
傾城買二筋道	四九

時代・形態別項目表

○人情本	
春色梅兒答美	二六
仮名文章娘節用	一四
○滑稽本	
風流志道軒伝	一五
道中膝栗毛	一五
浮世風呂	一五
浮世床	一五
花曆八笑人	一五
○咄本	
咄睡笑	一五
鹿の巻筆	一五
きのふはけふの物語	一六
○淨瑠璃	
國姓爺合戦	二三
傾城反魂香	二七
曾根崎心中	二七
丹波与作待夜の小室節	二七
冥途の飛脚	一五
博多小女郎波枕	一五
冥途の飛脚	一五
好色伝受	一五
毛矢之根	一五
鳴神拔	一五
○歌舞伎脚本	
歌舞伎十八番	一四
助勤進帳	一四
暫	一四
○狂歌・狂詩・狂文	
傾城浅間嶽	二二
三十石燈始	二二
大商蛭小島	二二
伽羅先代萩	二二
五大力恋緘	二二
東海道四谷怪談	二二
浮世柄比翼稻妻	二二
お染久松色読販	二二
与話情浮名横櫛	二二
ひらかな盛衰記	二二
一谷嫩軍記	二二
本朝二十四孝	二二
妹背山婦女庭訓	二二
新版歌祭文	二二
艶容女舞衣	二二
近頃河原達引	二二
神靈矢口渡	二二
三人吉三廓初買	二二
青砥稿花紅彩画	二二
天衣紛上野初花	二二
○和歌	
舉白集	一七
梨木本集	一七
賀茂翁歌集	一七
天降言	一七
六帖詠草	一七
桂園一枝	一七
良寛歌集	一七
平賀元義歌集	一七
草径集	一七
志濃夫廻舍歌集	一七
海士のかる藻	一七
○俳諧・俳文	
新增大筑波集	二五
談林十百韵	二五
貝おほひ	二五
芭蕉七部集	二五
冬の日	二五
春の日	二五
曠野	二五
ひさご	二五
猿蓑	二五
炭俵	二五
統猿蓑	二五
五元集	二五

時代・形態別項目表

玄峰集	野ざらし紀行	三三
笈の小文	三三	
更科紀行	八三	
おくのはそ道	九三	
幻住庵記	三五	
嵯峨日記	三六	
去来抄	一八	
三冊子	三三	
風俗文選	三一	
独ごと	三三	
鶴衣	三三	
夜半樂	七三	
新華摘	五六	
藤村七部集	二〇	
おらが春	九一	
千代尼句集	四五	
○川柳・雜俳		
武玉川	六九	
諷風柳多留	五六	
千代尼句集	二五	
花月草紙	二三	
○隨筆・その他		
難波土産	五六	
役者論語	五六	

駿台雑話	三四
常山紀談	三四
胆大小心錄	四五
源氏物語玉の小櫛	三三
玉勝間	四九
東遊記	四九
鳩翁道話	四九
折たく柴の記	一七
一話一言	二四
	三

五十音順項目表

〔目 次〕

青砥稿花紅彩画	一	大齒蛭小島	六
秋篠月清集	三	大 鏡	九
秋夜長物語	三	おくのほそ道	九
吾妻問答	四	小倉白人一首	九
海士のかる藻	七	お染久松色読販	一三
天降言	九	落窓物語	一五
和泉式部集	三	浮世親仁形氣	一四
和泉式部日記	五	浮世柄比翼稻妻	一四
伊勢物語	六	浮世床	一四
伊曾保物語	七	浮世風呂	一四
十六夜日記	三	雨月物語	一四
一谷嫩軍記	三	宇治拾遺物語	一四
一話一言	三	鶴歌	一四
一寸法師	三	薄雪物語	一四
今鏡	三	合	一四
妹背山婦女庭訓	三	宇津保物語	一四
石清水物語	三	恨の介	一四
老のくりごと	八	栄花物語	一五
笈の小文	八	江戸生艶氣樺焼	一五
老のすさみ	八	假名手本忠臣蔵	一五
往生要集	六	仮名文章娘節用	一五
閑吟集	六	歌舞伎十八番	一五
唐物語	七	賀茂翁家集	一五
源氏物語	七	唐糸草紙	一五
源氏物語玉の小櫛	七	唐物語	一五

菅家文草

大齒蛭小島

一卷

記紀歌謡

一九

義経記

一九

きのふはけふの物語

一九

伽婢子

一九

おらが春

一九

折たく柴の記

一九

女殺油地獄

一九

貝おほひ

一九

海道記

一九

懷風藻

一九

神楽歌

一九

花月草紙

一九

蜻蛉日記

一九

可笑記

一九

花伝書

一九

桂園一枝

一九

経国集

一九

傾城浅間獄

一九

けいせい色三味線

一九

傾城買二筋道

一九

傾城反魂香

一九

源氏物語

一九

源氏物語玉の小櫛

一九

五十音順項目表

幻住庵記	一五	駿台雜話	四三
建春門院中納言日記	三七	志濃夫廻舍歌集	三九
源平盛衰記	三六	しみのすみか物語	三一
玄峰集	三三	沙石集	三一
建礼門院右京大夫集	三三	西鶴織留	三九
好色一代男	三一	西鶴諸国はなし	三一
好色一代女	三一	催馬樂	三三
好色五人女	三一	嵯峨日記	三六
好色伝受	三一	狹衣物語	三一
好色敗毒散	三一	ささめこと	三一
江談抄	三一	讀岐典侍日記	三三
古今著聞集	三一	更科紀行	三五
国姓爺合戦	三一	申楽談義	三九
苔の衣	三一	猿源氏草子	三三
五元集	三一	山家集	三三
古今夷曲集	三一	三十石船始	三一
古事記	三一	三冊子	三一
古事談	三一	三人吉三席初買	三一
後拾遺和歌集	三一	三人法師	三一
御前義経記	三一	三宝絵詞	三一
後撰和歌集	三一	散木奇歌集	三一
五大力恋緘	三一	鹿の巻筆	三一
古本説話集	三一	詞花和歌集	三一
今昔物語集	三一	十訓抄	三一
忍音物語	三一	忍音物語	三一
菅原伝授手習鑑	四〇七	住吉物語	四二
新葉和歌祭文	四〇三	新版歌祭文	四〇一
神靈矢口渡	四〇五	新撰方葉集	四〇三
太平樂府	四〇六	新增大筑波集	四〇五
太平記	四〇六	新撰鬼玖波集	四〇八
他我身の上	四〇七	曾丹集	四〇七
大悲千碌本	四〇七	草庵集	四〇七
竹取物語	四〇七	草徑集	四〇七
玉勝間	四〇七	草根集	四〇七
歎異抄	四〇七	曾根崎心中	四〇七
胆大小心錄	四〇七	大悲千碌本	四〇七
丹波与作待夜の小室節	四〇七	太平樂府	四〇六
談林十百韵	四〇七	太平記	四〇六

五十音順項目表

近頃河原達引	西山物語	平賀元義歌集	ト養狂歌集
竹斎	修紫田舎源氏	毛利	発心集
竹林抄	日本永代藏	一七	本朝水滸伝
千代尼句集	二人比丘尼	二三	本朝廿四孝
椿説弓張月	日本書紀	二六	本朝二十不孝
通言總籬	日本靈異記	二九	本朝文粹
菟玖波集	野ざらし紀行	三五	ト養狂歌集
薦紅葉宇都谷峠	祝詞	三七	発心集
堤中納言物語	詠梅松論	三九	本朝水滸伝
徒然草	誹風柳多留	四一	本朝廿四孝
東海道名所記	博多小女郎波枕	四三	本朝二十不孝
東海道四谷怪談	芭蕉七部集	四五	ト養狂歌集
東関紀行	鉢かづき	四七	本朝文粹
道中膝栗毛	艶容女舞衣	四九	ト養狂歌集
東遊記	花曆八笑人	五二	発心集
徳和歌後万載集	英草紙	五三	本朝水滸伝
土佐日記	浜松中納言物語	五五	本朝廿四孝
とりかへばや物語	春雨物語	五六	本朝二十不孝
梨本集	保元物語	五七	ト養狂歌集
難波土産	方丈記	五九	発心集
男色大鑑	弁内侍日記	六一	本朝水滸伝
南総里見八大伝	平家物語	六三	本朝廿四孝
ひらかな盛衰記	平治物語	六五	本朝二十不孝
ひとりごと	平中物語	六七	ト養狂歌集
独ごと	明月記	六九	発心集
物臭太郎	冥途の飛脚	七一	本朝水滸伝
物臭太郎	伽羅先代萩	七三	本朝廿四孝

五十音順項目表

役者論語	七三
夜半樂	七五
大和物語	七七
鑓の權三重帷子	七一
遊子方言	七三
謡曲	七六
義經干本桜	七六
吉野拾遺	七三
四方のあか	七四
万の文反古	七六
与話情浮名横櫛	七六
夜半の寢覚	七〇
隆達小歌	七四
良寛歌集	七四
梁塵祕抄	七九
六帖詠草	七五
六輪一露	七五
和漢朗詠集	七七

あ

青砥稿花紅彩画

あおとぞう
はなのにしき

歌舞伎脚本 世話物 五

幕八場

河竹

黙阿弥

(当時二世河竹新七)

【解説】文久二年(一八六二)三月の市村座において初演された黙阿弥初期の代表作の一と目される。江戸末期において全盛を誇った、いわゆる白浪狂言(盜賊を主人公とした劇)の系列に属し、『三人吉三』と並んで、現在も繰り返し上演される。黙阿弥はこの作を、亀戸豊國の画いた當時の人気俳優の五人男の見立錦絵からヒントを受け、在来の白浪物中、日本駄右衛門その他の人名を借りて、通し狂言として書いた。これらの盗賊は、終幕に至つて青砥左衛門藤綱の手によって捕縛されるが、これは馬琴の『青砥藤綱模稟案』以来名奉行として人口に膾炙した青砥藤綱を登場せしめたもので、三世桜田治助にも、模稟案の翻案脚色『青砥稿』がある。本作の別名題としては、『弁天娘女男白浪』『江島育児生兒菊』『音菊弁天小僧』などがあるが、いずれも主人公である弁天小僧によつた名称で、後のはつは初演以来五世尾上菊五郎の当り役で、その後も音羽屋の家の芸とされたところから、菊の字を織り込んで組ま

れた名題である。『黙阿弥全集四』『岩波文庫』

【梗概】

序幕は長谷觀音の花見の場である。小山家の息

女千寿姫は長谷寺の花見に、許嫁の信田の小太郎と行き会つて、思いのたけを語るうちに、お家の重宝胡蝶の香合を渡して、小太郎の仮住居へ同行することになる。この小太郎なるものが、実は弁天小僧が重宝を奪うために化けていることを、千寿姫は知らない。一方御主君信田の左衛門の後室を伴つて、お家の再興をはかる赤星頼母は、甥の十三郎に主の命を救うため百両の金を調達するように頼む。十三郎は思い余つて、千寿姫が宝前に供えた回向料の百両を盗むが、たちまち小山の家来に見つけられ、奪い返される。これを行き交うた色奴の沼田幸蔵(実は忠信利平)がまた奪い取り、それに目をつけた信田小太郎の仲間(実は南郷力丸)がさらに奪おうとするのを、結局忠信に持つて行かれ。話変わって、千寿姫を連れた信田の小太郎は人気のない神輿ヶ岳の辻堂で化の皮をあらわすので、愕然として千寿姫は谷へ身を投げる。と辻堂の中から修驗者風の日本駄右衛門が現われ、見とがめられた弁天小僧は結局、駄右衛門の手下になる。一方、せつかく手に入れた百両を奪われた十三郎が申しわけに死のうとするのを、忠信は止める。二人はかつての主従であることがわかり、忠信は百両を十三郎に返し、十三郎は駄右衛門の一味に加わり、盗賊となつて、お家再興の金をつくることになる。ここへ南郷と弁天が現

われ、おあつらえのだんまり模様。さて三幕目が眼目の浜松屋である。娘に化けた弁天小僧は、南郷を若党に仕立てて、浜松屋へ来て、万引と見せかけて、店の者に打擲させ、それを言いがかりに金をゆすらうという魂胆。それを用人役の玉島逸当が見破るので、二人はしぶしぶ引き揚げる。ところが実はこれがまた狂言で、二人の去つた後、浜松屋の亭主が逸当に礼をしようというと、にわかに逸当は日本駄右衛門の本性を現わし、強盗に早変り、弁天、南郷も暴れ込み、あわやというところで、実は亭主の伴宗之助は、駄右衛門の実子、弁天は亭主の実子と知れて一同驚く。第四幕は稻瀬川で有名な勢揃いの場である。ここに五人男が揃って、捕手と立ち回りの末、捕手を倒して画面の見得。第五幕では胡蝶の香合をかえそうとする弁天が、悪次郎に香合を奪われ、極楽寺山門の屋根に追い上り、捕手にかこまれ立腹を切る。一方駄右衛門は山門で、捕手を斬り倒すが、他の四人も捕われたり、死んだりした次第を聞き、神妙に青砥左衛門藤綱の縛につく。肝心の胡蝶の香合は、滑川の底に沈んでいたのを、青砥藤綱が、銭一〇文を落したのを拾うために、五〇文の松明を使って搜させた時、一緒に拾い上げて、めでたしめでたし。

【鑑賞】歌舞伎の脚本——特に後期の作を純粹に文学的立場から鑑賞することは不可能である。文学として読んだら、むしろ失望するばかりだ。この作でも、作中人物の「実は

実は」がうるさく重なつてきて、それならそこまで運んできたのは、一体何のためだつたかと作者の頭を疑いたくなれる。けれどもそういう理屈をいつたら、歌舞伎脚本の鑑賞はできなくなる。歌舞伎脚本は、もつと官能的に、主役に扮する人気俳優の肉体を同時に思い浮べながら、そこに展開される豊満な色彩的な雰囲気に酔う以外にない。それができない読者は、遠慮なく捨てるがいい。——冒頭から極論のようなことを持ち出したのは、「これが『あ』の項で、本辞典の歌舞伎脚本の最初に出る項目であると思つたからだ。そして、そういう観点に立つた場合には、本作は從来繰り返し上演されるに足る世話物の代表作たるにふさわしい充足感を持つてゐる。序幕はおそらく『新薄雪物語』の花見を想定して執筆されたものだろう。華麗な舞台を背景に、小姓、色奴、若衆、姫が次々登場し、絢爛たる歌舞伎絵巻を開ける。一転しては神輿ヶ岳の暗鬱な殺し、だんまり。やがてそれが、いわゆる生世話特有の情緒的な写実感の中へ、大振袖の美女が尻をまくつて大あぐらという、本作中第一の頂点を開けるのである。当時の退廃美を好む風潮を、これほどうまくキャッチした場面は、歌舞伎作品中にも数少ない。思うに歌舞伎は当時の町人子女の愛好を得ていたから、これらの子女は、女装している人気俳優五世菊五郎（当時、羽左衛門一九歳）が、一気に尻をまくつて見せる場面では、どよめきに似た嘆声をもらしたに違ひ